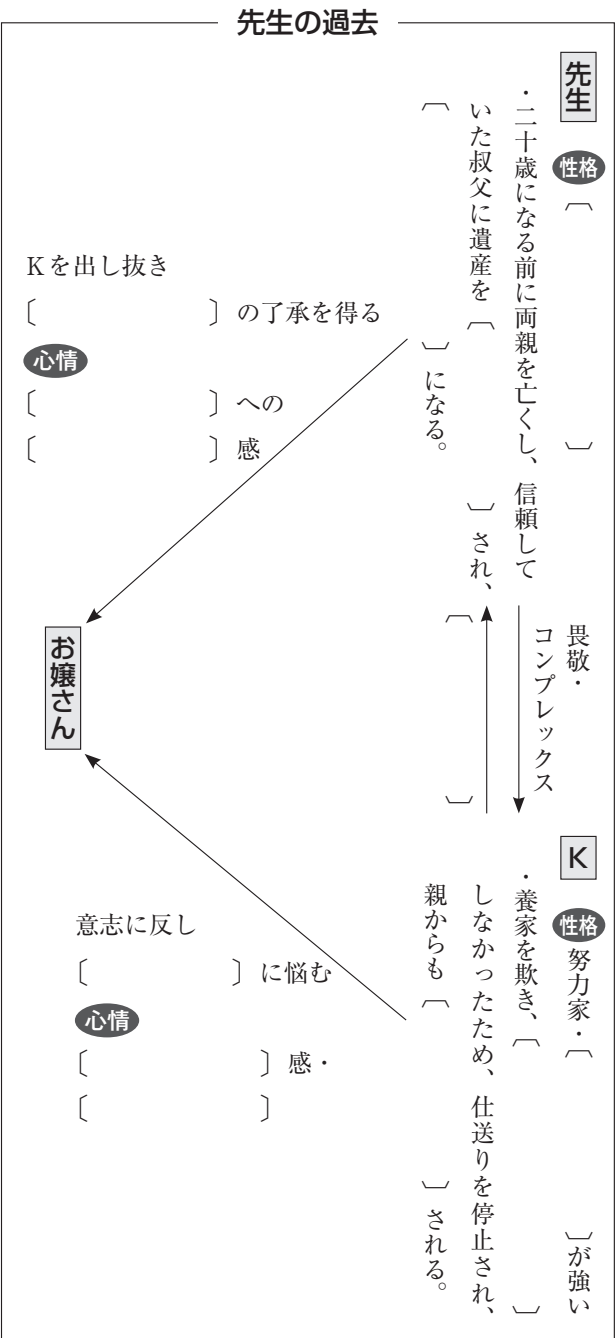


『ひこう』登場人物関係図

私 目標もなく 「」を送る。

「」を持つ 『先生の過去』に興味を抱く。

先生からの 「」 「」の中で明かされる



夏目漱石について (一八六七(慶応三)年~一九一六(大正五)年)

東京牛込に生まれる。生後すぐ里子に出されたり、他家へ養子に出されたりした。早くから漢籍に親しみ、漢学塾の二松学舎に入学、「」的 な倫理観や「」的 な美意識を身につけた。第一高等中学校本科に進学。この頃、同級生の「」から句作の手ほどきを受け、俳句を始める。明治二三年、「」大学「」科に入学。同二六年に大学院に進学。同二八年、旧制松山中学に「」として赴任。この松山での体験が、後に中編小説『』を生む。翌年、熊本の第五高等学校に教授として赴任。その後、文部省留学生として「」に渡った。しかし、日々実感する西洋との隔絶感などのために、強度の「」に陥る。この留学体験から、「」の立場を固めた。帰国後、「」講師を務めながら、高浜虚子の勧めで『ホトトギス』に『』を連載。以後、『倫敦塔』『』を執筆する。文壇は自然主義の最盛期であったが、漱石は余裕を持って人生を眺める立場を崩さず、「」と批判された。明治四〇年、教職を辞め「」に入社。以後、新聞小説として『坑夫』『夢十夜』『三四郎』などを掲載。「三部作」と呼ばれる『三四郎』『』を執筆する。途中に、伊豆の修善寺で大吐血し、生死の間をさまよう。この「」は、漱石の間観・死生観に大きな変化をもたらし、エゴイズムの問題を追究した『彼岸過迄』『行人』『』が書かれることとなる。このころ漱石は、『』や『私の個人主義』など、講演も精力的に行った。晩年には漱石が到達した理想の境地「」の作品化ともいわれる『』の執筆にとりかかったが、病状が悪化し、未完のまま亡くなった。なお、筆名である「漱石」は、故事成語「」から取られた。(p. 374 参照)